

The Passions
of the Mind

青春のウィーン

小説フロイト1

アーヴィング・スタッド

橋本福夫訳

早川書房

THE PASSIONS
OF THE MIND

by Irving Stone
Copyright © 1971
by Irving Stone
First published 1984 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Doubleday & Company, Inc.,
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

小説 フロイト 1
—青春のウィーン—

昭和59年4月30日 初版発行

*

著 者 I・ストーン
訳 者 橋 本 福 夫
発行者 早 川 清

*

印刷 信毎書籍印刷株式会社
製本 株式会社 明 光 社

*

発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2-2
電話 東京(252) 3111 (代表)

振替 東京・6-47799

定価 2700円

0023-904680-6942

小説フロイト1
——青春のウィーン——

日本語版翻譯權独占
早川書房

© 1984 Hayakawa Publishing, Inc.

わが妻

ジーン・ストーンに捧げる――

彼女は

これまでにわたしの書いた

二五冊の著書において

「一つ屋根の下にある編集者」であり

さらにそのほかの時間には

すばらしい家庭を営み

われわれの仕事の面での諸事を処理し

二人の子供を育て

刺激的な社会生活を維持し

コミュニティのためにつくし

気むずかしい夫を満足させてくれた

感謝と愛をこめて

「不滅とは、多くの無名の人々に愛されることだ」

——ジークムント・フロイト

目次

第一章	愚者の塔	9
第二章	憧れる魂	105
第三章	細い線上の歩み	201
第四章	パリの田舎者	291
第五章	医者の方箋	365
第六章	冬の束縛からの解放	

第一章 愚者の塔

すらりとした若々しい二人は、リズムカルな歩調で勢いよく小径を歩いていった。近くの牧草地では、黄色い花々が背の低い牧草のあいだからのび出ている。絹のような花びらのオキナグサは復活祭が過ぎるとともに散ってしまっていたが、春咲きのヒースやサクラソウやイヌバラなどが、ブナの木のかげに色とりどりのカーペットを織りなしていた。

彼は男としては背の高いほうではなく、しゃんと立っている時でもせいぜい五フィート七インチ程度だった。それでも、自分のそばのしなやかな身ごなしの女性とはちょうど釣り合った背丈だという気がした。彼は、くっきりした顎、鼻、眉毛のマルタ・ベルナイスの横顔にこっそり目を走らせた。彼には自分の身に起きた事態がどうにも信じられなかった。まだやっと二六歳で、ブリュッケ教授の研究所で生理学の研究に没頭している身だったのだから、恋愛にふけったりできるのは、はるか五年さきのことだろうし、結婚の可能性にいたってはまるまる一〇年もさきのことと相違ない。化学は得意科目ではなかったが、恋愛とカレンダーとは調合できないものだということぐらいは悟っていたはずではないか。彼は、「そんなことはありえない。起きるはずもないことだ！」と呟いた。

彼女はびっくりして彼のほうへ向き直った。森のなかは日ざしがさえぎられ、やわらかな明るさに満ちていた。それというのも、灰色のカバの林はすっかり下枝を切り落とされていて、ずっと上の緑色の日傘のような葉叢が陽光をさえぎっていたからだ。マルタの顔がこの上なく美しく見えたのも、おそらくは、メイドリング市を見おろす森のこうしたものやわらかな明るさをたたえた木かげのせいだったのだろう。彼女は美人ぶったりしない女性だったが、彼にはすばらしく魅力的な人のように思えた。大きな灰色がかった緑色の目は感受性にとみ、やさしさをおびてもいれば、洞察力と、毅然とした自主性を示してもいた。濃いとび色の髪はまん中で分けて耳のうしろまでびったり撫でつけられ、分け目がくっきりとした白い線を描いていた。鼻は多少そりかげんだったがいいかたちをしており、ふっくらした赤い唇がすばらしかった。少なくとも彼にはそう思えた。もっとも顎はほっそりした顔とはいくらか不釣り合いなほどがっしりしている感じではあったが。

「何があるえないんですの？ 起きるはずもないってなんのことですの？」

二人は緑の葉叢の屋根から陽光がもれている曲がり角にさしかかっていた。

「僕は口に出して言ったりしましたか？ きつと森がこんなふうに静まりかえっているせいでしょう。そんなにはっきり聞こえたのなら気をつけなくてはね」

今ももう、二人は中腹の台地までたどり着いていて、平らな岩棚にのぼると眼下にメイドリング市が見おろせた。下方の公園で演奏している楽団の音楽のかすかな旋律が漂ってきた。メイドリングはウィーンから汽車で一時間ほどの距離にある美しい田園都市で、ウィーンの人々がよくでかける休日の憩いの場所になっていた。タイル張りの屋根の列が、暖かい六月の日ざしをあびて輝いており、まるで小さな紅海のようなだった。そのさきのほうには、ブドウの房をたわなにみらせているブドウ畑

が山の斜面を這いのぼっていた。来春には、この畑でとれるブドウの「新酒」を、ウィーンの人たちは、グリンツィングの新ブドウ酒酒場で飲むことだろう。

マルタ・ベルナイスは、メードリングのグリルパルツァー通りに暮らしている、彼女の一家の友人の家に滞在していた。ジークムントのほうは、その朝ウィーンからズエートバーン、すなわち南部鉄道でやってきたのだった。二人はカイザー・フランツ・ヨゼフス広場を歩いていった。以前猛威をふるった疫病を征服した記念に建てられた、金の線条細工がほどこされた華麗なベスト記念円柱がたっているその広場を通りぬけると、大時計や、タマネギを積み重ねたような尖塔のある市役所のところまでハウプト大通りを歩き、ついでプファル・ガッセにはいつて、噴水の横を通り、ひとときわ高くそびえ立っている聖オトマール教会の前まで来た。教会の向かい側には円形の石造りの塔があった。

「イタリアの授洗所みたいですけれど」とマルタはそちらへ目をやりながら言った。「メードリングの人たちは昔の納骨塔だと言い張っているのですよ。どういうわけで人間のからだのほかの部分はぬきにして、遺骨だけを入れておいたりするのか、あなたは医者さんなのだから、教えてくださらない？」

「訓練も経験もつんでいないかけだしの医者なのですからね、全然見当もつきませんよ。あなたこそ、その問題についての研究論文をお書きになったらいいではありませんか。僕が医学部に提出して、あなたの学位を請求してあげますよ。ドクターになりたくはありませんか？」

「とんでもない。わたしは主婦になって、六人くらい子供がほしいと思っていますわ」
「それなら異例な野心ではありませんね。べつに苦勞しなくても実現できるでしょう」

森の奥深くへはいると彼女の目はエメラルド色をおびてくるようだった。

「そういうことが実現したあとのことなんです、わたしが苦勞したくないのは。なにしろわたしはロマンティストなのですもの。夫を愛し、五〇年くらいは平和に暮らしたいものですわ」

「野心家ですね、あなたは！ あなたもハイネの詩をおぼえていらっしゃるでしょう？」

「結婚なんかするのではなかった」

あわれなブルトンはいくたび嘆いたことか。

「花嫁を家につれて帰ってからというものは、

わたしは悟った、妻のいなかったころは、

地獄もまだ地獄でも責め苦でもなかった。

あのたのしくて魅力のあつた独身生活！

ペルセポネと結婚してからというものは、

一日として、死んでいたらと思わない日はない！」

彼女は眉をつりあげた。「まさかあなたはほんとうにそんなことを信じていらっしゃるのではないでしょうね？」

「僕が？ とんでもない！ 結婚というやつは僕みたいに単純な人間のために案出されたものなのですからね。いったん式を挙げたら、僕はきつと結婚生活に耽溺することでしょう」

「誇張した言いかたはほんとうの感情を隠そうとする人間のすることだと言ったのは、あれはゲーテでしたかしら？」